

フィールドは舞鶴湾

京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所

准教授 益田 玲爾 さん

魚の魅力に取りつかれ、その生態や行動心理までを解明しようと、調査のために年100回は海に潜り、マアジやイシダイ、ヒラメなどとともに舞鶴の海を泳ぎ続ける。国内外で論文執筆や学会研究発表と多方面でご活躍の京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所 准教授の益田玲爾さんにお話を伺いました。



魚の魅力

魚の魅力を尋ねると、「好きなものに理由はありません」ときっぱり。そして、目を輝かせて「魚の泳ぐ姿の美しさですかね」と笑顔で益田さん。同じ動くものでも車などの工学的なものではなく、生き物である海洋生物に興味を持ったことが研究者になるきっかけ。東京大学海洋研究所で学位を取得し、イギリスやハワイの研究勤務を経て、平成12年度に現職に就いた。

また、魚のもつ一つの大きな魅力は「食べられることです」とのこと。人類が生きていく上で、魚は食べる対象とする視点がどうしても必要。魚は種類が多く、食べ方のバリエーションも多様。調理の工夫も文化として発展してきた。「たいていの魚はとれた次の日に食べるのが一番おいしいですよ。それは、たんぱく質がほぐれ分解され、うまみ成分であるアミノ酸が発生するから」と研究者らしい解説。

研究のテーマ

魚の群れはいつごろ、どのように形成されるか。捕食者を超える上でのように機能しているか。比較的若い時期にピークを迎える魚類の学習能力とは。そして、放流後ほとんどが食べられてしまう養殖条件下で飼育された稚魚たちが自然界にうまく適応するには、なにかが主な研究のテーマ。

具体的な内容を伺うと、「例えばイシダイをY字の迷路に入れ、右に行けば餌があるところをうまく学習させる」といいます。

は右方向に餌があるということを覚えませぬ。覚えたら餌の場所を反対にするという作業を繰り返すことで、魚が最も学習するのが体長7センチの時期というのが分かる。このデータを利用すれば、養殖した魚を放流する1番良いタイミングを見極めることができるんですよ」と説明。

また、「不安やストレスを持っていることは魚も人間と同じ。ある一定の負荷をかけることで魚の行動心理はどのようになるかを調べ、良い結果を人類にも応用できないかなどの研究も行っています。だから研究の最終目的は、『海洋資源の保全・管理』と『魚の行動心理の研究が人間に通用するか』なんです」と説いた。

潜水調査とダイビング

研究方法は、飼育実験と潜水調査が大きな柱。潜水調査で月に2回は舞鶴湾に潜り、さまざまなデータを集める。「潜ると温暖化の影響で南方系の魚が増えていることなどがよく分かります。また、東日本大震災の後、宮城県気仙沼市の海にもこれまで23回潜りました。津波でいなくなった魚のどんな種が、どのように、そしてどれくらい戻り定着するかを調査しています」。

潜水調査を仕事とする一方、「趣味もダイビングなんです(笑)」。荒波で水中マスクが取れたり、体長2メートル超のサメに襲われかけたりした冷や汗交じりのエピソードも交えて「やはり、根っからの魚と海好きなんです(笑)」と笑いながらも熱く語ってくれました。

まいづる花図鑑 102

【タネツケバナ】 (アブラナ科) 見ごろ 花期 2~5月頃



至る所の田畑や道端などのやや湿った所に生える越年草。冬はロゼット状に葉を広げて過ごす。茎は高さ10~30センチ位、基部から枝分かれし、下部は黒紫色を帯びる。葉は羽状複葉、小葉は細長い楕円形で3~8対。一番上の小葉はやや大きい。早春、枝先に十字形の白色の小花を穂状につける。

名前の由来は「種漬花」で、苗代にまくイネの種もみを漬ける頃に花が咲くことから。若葉は食べられる。

【協力】

瓜生勝朗 市文化財保護委員(植物分野)

